

「馬鹿」の変遷

—現代語の程度副詞用法に着目して—

嶋田 優輝¹ 岩崎 真梨子²
(¹人間文化学科4年 ²人間文化学科)

本研究では、近年、形容動詞の「馬鹿」に「バカ暑い」や「バカ面白い」のような程度副詞用法が見られることに着目した。ここで「バカ」は「とても」という意味である。「馬鹿正直」や「馬鹿に素直だ」のような従来からある用法とは異なり、「に」を伴わない「馬鹿+形容詞」の形で用いられている。こういった例がいつ頃から、なぜ見られるようになったのか興味を持ち、『日本語歴史コーパス』で「馬鹿」の用例を検索して通時的に検討した。今回採取した用例によると、程度を表す「馬鹿」自体は近世からすでに見られるが、古くは「馬鹿律儀」のような「馬鹿+単語」の形で現れていた。そこから「馬鹿に甘い」のような「馬鹿に+単語」の形が見られるようになり、表現の幅も広がっていった。現代語の「バカ暑い」のような程度副詞用法は、明治期頃に広がりを見せた「馬鹿に+単語」と意味的には同じであり、形として「馬鹿+単語」に統合されたのではないかと考えた。

【キーワード 史的変遷 形容動詞 程度副詞 日本語学】

1. はじめに

「馬鹿」は、「馬鹿な人」「馬鹿なことをするな」など、形容動詞として用いられている。また、相手を罵倒するマイナスの意味で用いられている。しかし、近年では「馬鹿」に以下のような用法が見られる。

(1) バカ暑い夏はまだまだ続きます (ブログ 2024-07-27[2024年11月27日検索])

(2) ちょっとブログで具体的にナニとは書きづらいけど、バカ面白いことをするおじさんと従兄弟。

(ブログ 2024-10-26[2024年11月27日検索])

例に挙げた表現に用いられる「馬鹿」は「とても」のような意味を表しており、後に続く「暑い」や「面白い」の意味を強めている。つまり程度副詞的な意味・用法と考えられる。

このような「馬鹿」の例は、いつ頃から、どのようにして用いられるようになったのだろうか。本稿では、このような形容動詞用法以外の「馬鹿」に着目することで、あまり良い印象を持たれない「馬鹿」という言葉が強調の意味で使うようになった時期を調査し、現代にどのように繋がっているのか考察していく。なお、本稿は筆者（以下、筆者は嶋田を指す）の卒業論文「日本語学における馬鹿の歴史的変遷について」を加筆・修正したものである。

2. 研究背景

このような研究をしようと思った背景として、筆者自身が言葉に対して強い関心を持っていたことが大きい。日常で必ず使われる言葉において、相手の使う言葉がどのような意図で発せられたものかを考えることはあっても、その言葉自体がなぜそのような意味を持っているかを考えることは多くないと思う。

そうしたなかで、関心のある言葉について研究しようとしたときに、意味の違いが生じる言葉をテーマにすると面白いのではないかと考えた。例を挙げてみたところ、「馬鹿力」という単語が思い浮かんだ。「馬鹿」を単体で使うときは基本的に相手を貶すような意味で使われているのに「力」を付けるだけで「馬鹿」の持つイメージが変わるという点に着目し、「相手を貶す使い方」が「言葉の意味を強める使い方」に転換する仕組みを調べたいと考え、今回のテーマを設定した。

3. 先行研究

嶋海(2015)では、「真実」や「まことに」「ほんとう (に)」「事実」「実際」に程度用法が生じていることが指摘されている。これによると、「真実」とその類義語には⑦「真実性 (嘘偽りない)」 → ①「真実であると評価する

(主観性・実感性) → ㊦「事態成立の度合いの強調(一般化・脱個別化)」の過程を経て広義程度副詞化していると述べられている。さらに、「真実」「まことに」「ほんとう」は㊦の段階まで進んでいるのに対し、「事実」「実際」はほぼ㊧の段階にとどまっているということが指摘されている。

「馬鹿」に関して、相手を罵倒する表現であったのが、「バカ暑い」で「とても暑い」のような程度の意味を表すようになっている。「真実」と比べるとはじめから主観的な意味・用法を有しているが、評価から強調へという変遷は同じではないかと考える。さらに、鳴海(2015)で挙げられている「まことに」「ほんとうに」の「に」にも着目したい。「馬鹿」にも「馬鹿正直」など「に」を伴わない例と、「馬鹿に素直」という「に」を伴う例がある。筆者は現代語の程度副詞用法の成立において「馬鹿に+単語」の例が重要であると考えた。

また、深津(2002)では「ちっと/そっと」という2語に焦点を当て、容態副詞の程度副詞化について述べている。深津氏は程度副詞を調査するうえで程度副詞の条件を「前後の要素から明らかに程度的意味を持っているもの」と「名詞的位置に現れたもの」としており、この条件を満たすことが程度副詞の発現であると指摘されている。本稿でもこの点を参照した。

4. 「馬鹿」の意味・用法と分類

4-1. 辞典における記述

「馬鹿」の意味・用法について、『日本国語大辞典 第二版』では以下の通り記述されている。なお、紙幅の都合上、用例の一部を省略した。

ばか【馬鹿・莫迦・破家】[名]（「馬鹿」はあて字。梵語のmoha＝慕何(痴)、またはmahallaka＝摩訶羅(無智)の転で、僧侶が隠語として用いたことによるという)

(1) (形動) 知能が劣り愚かなこと。また、そのさまやその人。あほう。

*文明本節用集〔室町中〕「馬鹿 バカ 或作母嫁馬嫁破家共狼藉之義也」

*甲陽軍鑑〔17C初〕品一三「此家中には、何たる馬嫁(バカ)も、むさと知行を取ぞと心得て」

*浮世草子・好色一代男〔1682〕五・三「女郎まじりの大踊、みるから此身は馬鹿(バカ)となって」

*正義と微笑〔1942〕〈太幸治〕「木村のお父さんが、のっそり玄関先に立ってみた。『うちの馬鹿が来てみませんか』と意気込んで言ふ」

(2) (形動) 取るに足りないつまらないこと。無益なこと。また、常軌を逸したことやそういうさまをいう。たわけ。

*滑稽本・浮世床〔1813～23〕初・中「いつまでも馬鹿(バカ)止ねへはな」

*当世書生氣質〔1885～86〕〈坪内逍遙〕二「馬鹿(バカ)な口計たたいて居るかと思やア」

*火の柱〔1904〕〈木下尚江〕二四・二「斯様(こんな)馬鹿な話がありますか」

(3) 本来のはたらきを果さない状態。当然持っているはずの機能がはたらかない状態。「鍵がバカになる」→ばかになる(2)。

(4) 程度のはなはだしいこと。多く名詞の上に付けて接頭語的に用いる。「馬鹿騒ぎ」「馬鹿力」など。→ばか(馬鹿)に。

*当世書生氣質〔1885～86〕〈坪内逍遙〕一二「馬鹿(バカ)忍耐の強い男だ」

(5) 「ばかがい(馬鹿貝)」の略。

*談義本・風流志道軒伝〔1763〕四「かくのごとくの丸裸、馬鹿(バカ)のむき身と笑れて」

(6) 銭の数をはかる用具。二対一の長さのクランク型の金属製の棒で、長い方で一〇〇文を、短い方で五〇文を数える。

*雑俳・柳多留 - 六〔1771〕「まったりとばかときせるでしんを切」

*俚言集覧〔1797頃〕「馬鹿(略) 銭を刺貫く銭の串に馬鹿と云ものあり」

(7) 釣竿よりも糸を長くすること。また、その長い部分。

以上の通り、『日本国語大辞典 第二版』では、「馬鹿」の意味・用法を7つに分類している。これを参照して用例を分類することにした。次節で用例とその分類について記述する。

4-2. コーパスにおける用例収集と分類

本稿では、国立国語研究所（2024）『日本語歴史コーパス』（バージョン 2024.3, 中納言バージョン 2.7.2）<https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/>（2024年4月17日確認）を用いて用例を収集した。短単位検索、語彙素読み「バカ」で抽出した結果、1410個の用例を得た。これらを意味と形式に基づいて6つに分類した。

分類1：強意・強調の意味を含む強意型	(152例 10.8%)
分類2：形容動詞として使用される通常型	(1105例 78.4%)
分類3：主に「馬鹿げる」という形で使用される動詞型	(26例 1.8%)
分類4：主に「馬鹿らしい」という形で使用される形容詞型	(100例 7.1%)
分類5：慣用的な表現で使用される慣用型	(17例 1.2%)
分類6：その他	(10例 0.7%)

以下、分類別に用例を2〜3例ずつ挙げる。

分類1：強意・強調の意味を含む強意型（152例）

- (3) 「どうでふて寝の持病をば薬ばかりで治そうとは今まで此方の馬鹿律儀だあ」
(CHJ, 53-人情 1835_04010, 82010, 春色辰巳園 1835)
- (4) 「其他各省何處へでも藻潜り込み、馬鹿に威張つたり冷評したりする御役人様に」
(CHJ, 60M 太陽 1895_09031, 2120, 朝顔 1895)

分類1では今回の研究対象である強意や強調の意味を含む「馬鹿」をまとめた。(3)(4)のように「馬鹿(に)+単語」の形が主になっている。

分類2：形容動詞として使用される通常型（1105例）

- (5) ばかばかり言てみずとも帰る支度をしなな (CHJ, 53-人情 1832_02001, 64180, 春色梅児与美 1832)
- (6) あはははははもう其様に寄てかかつて馬鹿にするとこの子は泣出すよ
(CHJ, 53-人情 1851_07006, 31860, 春色連理の梅 1851)
- (7) あの莫迦の言ふことが、信用できるもんですか (CHJ, 60N あら 1915_11012, 9190, あらくれ 1915)

分類2は強意・強調の意味ではない形容動詞の「馬鹿」をまとめた。いわゆる相手を蔑む言い方もこの分類に含めている。現代語で「馬鹿」を説明する際、一般的に想起される意味であると考えられる。

分類3：主に「馬鹿げる」という形で使用される動詞型（26例）

- (8) 余はかかる馬鹿氣たことで待つて居ることが四五十分程であつた
(CHJ, 60M 太陽 1901_10026, 14870, 臺灣中央山脈の横斷 (承前) 1901)
- (9) 常識から云へば馬鹿氣た事だが、僕は何かあいつと眞面目に話をしてみるとき
(CHJ, 60M 太陽 1917_01037, 54120, 戯曲生きんとすれば 二幕 1917)

分類3は動詞の形になっているものをまとめた。(8)(9)のようなタ形が最も多く15例(57.7%)、テイル形6例(23.1%)、「馬鹿げきった」3例(11.5%)、「馬鹿げたる」2例(7.7%)である。

分類4：主に「馬鹿らしい」という形で使用される形容詞型（100例）

(10) よしておくんなんしばからしい (CHJ, 52-洒落 1787_01065, 135470, 総籬 1787)

(11) をやばからしいなんでありますへ (CHJ, 53-人情 1831_05005, 55770, 仮名文章娘節用 1831)

分類4は「らしい」という接尾語を付けて形容詞の形となっているものをまとめた。本研究のテーマである強意の「馬鹿」と近い立ち位置であると考えて分類したところ、100例(7.1%)を得た。これは、分類2、分類1に次いで3番目に多い用例数である。このことから、「馬鹿」を形容的に用いる用法が一定以上存在していることがわかった。なお、「馬鹿らしい」の形をとっていても分類1とした用例がある。これについては5節で詳しく述べる。

分類5：慣用的な表現で使用される慣用型 (17例)

(12) 馬鹿につける葉はねへよう (CHJ, 53-人情 1838_01010, 30780, 花廻志満台 1838)

(13) 土壇場に來りやア正直な方が馬鹿ア見るんだ (CHJ, 60M 太陽 1901_01029, 232270, 櫛紅葉 1901)

(14) 人うつけ、馬鹿も休み休み言ひねえ (CHJ, 60M 太陽 1909_02026, 69590, 銅山王 1909)

分類5は慣用的な表現をまとめたものである。意味的には、『日本国語大辞典第二版』の(1)「知能が劣り愚かなこと。また、そのさまやその人。あほう。」や(2)「取るに足りないつまらないこと。無益なこと。また、常軌を逸したことやそういうさまをいう。たわけ。」のいずれかに相当すると考えられる。

分類6：その他 (10例)

その他に関しては、今回の研究対象には含めない。基本的に、一時的に見られ語として定着しなかったと考えられる単語で、『日本国語大辞典 第二版』の「馬鹿」の意味分類に当てはめにくいと判断したものはその他とした。以下、分類6内の語に関する意味の記述は、すべて『日本国語大辞典 第二版』によるものである。

(15) 是は全く必度が我々に四月馬鹿を食はせるなり

(CHJ, 60M 国民 1888_17006, 27050, 大東號航海日記 (四) 1888)

(16) 革緒の雪駄おとのみはすれど、馬鹿ばやしの仲間には入らざりき

(CHJ, 60N たけ 1895_11004, 3410, たけくらべ 1895)

(17) 人倫の道は次第に廢れて、親馬鹿チヤンリンの道などと恩を踏みつけになし

(CHJ, 60M 太陽 1895_10032, 1050, 山海の恩 1895)

(15)の「四月馬鹿」は「四月」「馬鹿」というそれぞれの語を足した言葉ではなく「四月馬鹿」で一つの単語とみなしたほうがよいと考える。意味としては、

欧米の習慣で、四月一日を罪の無い嘘をついてもよい日と定め、嘘をついて楽しむこと。また、その四月一日。エープリル・フール。《季・春》

と説明されており、訳文¹であることから「馬鹿」の用例としては例外的であると判断した。

(16)の「馬鹿ばやし」については、

江戸時代から、東京とその周辺で行なわれる祭礼で、山車などの上ではやされる囃子。大太鼓、締太鼓、摺鉦(すりがね)、笛などを用い、にぎやかで、活気に富む囃子。里神楽から出たとされ、おかめ、ひょつとこなどの面をつけた馬鹿踊りがつくところからの称という。馬鹿太鼓

とあった²。

¹ ジュール・ベルヌ作、森田思軒訳とある。なお、「四月馬鹿」は『大東號航海日記 (四)』に4例見られた。

² 名前の由来と考えられる「馬鹿踊り」については、『日本国語大辞典 第二版』で

一定の型によらないで、むやみにはねまわって踊ること。

と説明されている。さらに「むやみ」について『日本国語大辞 第二版』で調べると、

(1)前後を考えないこと。理非を分別しないこと。また、そのさま。(2)度を超すこと。また、そのさま。むやく。

(17) 「親馬鹿チャンリン」という言葉は元々「お山コ三里」というフレーズから来ているという説があり、また「親馬鹿」という言葉との関連性が見られなかったため、その他とした。

ここまで挙げてきた(15)から(17)は、辞典での説明から、「馬鹿」の意味が弱い一語化した単語であると判断した。一方、以下の「馬鹿世界」は、調べた限りでは辞書類での掲載が見当たらなかった。

(18) 武野俗談、愚痴拾遺物語、武士なまり、馬鹿世界、醫殺論、盲千明一論、譏り草

(CHJ, 60M 太陽 1901_07024, 48370, 徳川時代の出版法と處刑人 1901)

前後の単語から、なにかの作品である可能性が高いと考えたが、馬鹿な人を主題とした世界の話なのか馬鹿な事柄を主題とした世界の話なのか、あるいは程度が甚だしいなにかを主題とした世界の話なのか判断ができなかったため、今回はその他に分類した。

最後に、感動詞的に用いられている「馬鹿」の用例を挙げる。

(19) 帷子はどんなんたい。表は唐草、裏は花色木綿。馬鹿。(CHJ, 60R 小き 1903_01017, 8670, 葛の葉抜裏 1903)

(20) 何が痛えもんだ。とうに、へえ、癒つたでねえか、馬鹿

(CHJ, 60M 太陽 1917_04038, 123680, 恐ろしき結婚 1917)

(20)は落語のオチ、あるいは話の締めとして使用されていると考えた。(21)についても、「馬鹿」自体に「愚か」などの意味を持たせているというより、呼びかけのような感動詞に近い働きであると判断してその他とした。

5. 「馬鹿」の史的変遷

4-2節の分類に基づいて、『日本語歴史コーパス』から得られた用例を時代別にまとめたのが表1である³。

表1 「馬鹿」の時代別・分類別の用例数

	近世	明治期	大正期	昭和期	分類合計
分類1	8	69	71	4	152
分類2	78	617	402	8	1105
分類3	0	13	13	0	26
分類4	30	41	29	0	100
分類5	2	10	5	0	17
分類6	0	8	2	0	10
時代合計	118	758	522	12	1410

全体的に明治時代、大正時代の用例が多く得られた。また、昭和期の用例はすべて国語教科書のものであり、掲載されている作品の初出版年が昭和期以前のものも含まれていた。用例の採取については課題が残るが、少なくとも近世では既に強意の「馬鹿」が使用されていたのではないかと考える。以下、用例を時代ごとに見ていく。

5-1. 近世の「馬鹿」

分類1：強意・強調の意味を含む強意型

近世の分類1の「馬鹿」は、8例中7例が「馬鹿律儀」である。

(21) 破家押の強は見ゆるし。給ひねかしと。(CHJ, 52-洒落 1826_01063, 3640, 花街寿々女 1826)

と説明されている。この「むやみ」を(1)とするか(2)とするかで解釈が分かれるため、今回はその他として分類した。

³ 用例数は延べ語数である。

- (22) 馬鹿律義なことをお言だねへ (CHJ, 53-人情 1836_01002, 33270, 花廼志満台 1836)

近世においては、以下のような用例が見られることに着目したい。

- (23) 金をつかつて気を能しばからしきほどあどけなきが(CHJ, 53-人情 1832_02003, 24490, 春色梅兎与美 1832)
(24) 今日が日まで串戯にもそんなことをいはれたことのない私馬鹿らしい程一途の気性何が証古にいふのだへ (CHJ, 53-人情 1833_04003, 507070, 春色辰巳園 1833)

これらは、「馬鹿らしい」という形容詞の形で用いられているが、意味を見みると「とてもあどけないのが」と強意のような使われ方をしている。現代でいう次のような例と似ているのではないかと考える。

- (25) 上級練の強度はばかみたいに高くて、グラボは全然取れないし、チェックは痛いし、パスミスしたら先輩達にめちゃくちゃ迷惑かかるし…。 (ブログ 2024-12-18[2024年12月22日検索])

この例では強度の高さを「ばかみたい(=並外れて)」という言葉で強調していると考えられる。そこで今回、(23)(24)に関しては分類1として扱った。

分類2：形容動詞として使用される通常型

『日本語歴史コーパス』から得られた用例中で、最も早くから見られるのは分類2の「馬鹿」である。

- (26) これ、虎次郎あの馬鹿を相手にして日がな一日悪あがき (CHJ, 51-近松 1717_24001, 40790, 鐘の権三重帷子 1717)
(27) しばぎなに**ばか**つつらめ**君**また / \ / \ 口が過てどふもならぬ (CHJ, 52-洒落 1769_01001, 54810, 郭中奇譚 1769)
(28) **ばか**やめて今の物きつともたせてよこしなんせ (CHJ, 52-洒落 1769_01001, 54810, 郭中奇譚 1769)
(29) もしお照様一の谷の狂言では、熊ヶ谷といふやつは、**ばか**ものでございやすねへ (CHJ, 53-人情 1821_08003, 27220, 明鳥後の正夢 1821)
(30) 馬鹿なことをいひな。それはほんの短気といふもの死くれへなら何も苦勞をするにもあたらず。 (CHJ, 53-人情 1831_05001, 55210, 仮名文章娘節用 1831)

これらの用例は、人あるいは物事に対して「愚かである」ことを表している。(29)のような「馬鹿者」に関しては、「馬鹿」が名詞的に用いられているが、意味的に分類2とした。

分類3：主に「馬鹿げる」という形で使用される動詞型

今回採取した用例からは得られなかったが、『日本国語大辞典 第二版』で「ばかめる」を調べると、以下の用例が見られた。

- (31) 滑稽本・東海道中膝栗毛 - 発端 [1814] 「つれておこしなさるといふは、馬鹿気(バカゲ) きてゐるじやアござりませんか」

分類4：主に「馬鹿らしい」という形で使用される形容詞型

近世の「馬鹿らしい」に関しては、(31)が最も古い例だが、全体として終止形の割合が高く、80% (30例中24例)であった。

- (32) 早速の無心弟のことを頼むも、馬鹿らしけれど前髪姿に、神ぞ爪先よりぎり / \ まで (CHJ, 51-近松 1722_21001, 38610, 心中宵庚申 1722)
(33) 女郎ばからしい 此子は何だな (CHJ, 52-洒落 1776_01013, 51220, 当世左様候 1776)
(34) うめばからしいやあな 丹さんだつてもまんざらおめへの貞をつぶすやうなこともあるめへは (CHJ, 53-人情 1832_02004, 28390, 春色梅兎与美 1832)

分類5：慣用的な表現で使用される慣用型

以下の2例が相当すると考えた。

- (35) 馬鹿につける薬はねへよう (12)再掲CHJ, 53-人情 1838_01010, 30780, 花洒志満台 1838)
(36) どうでも私の貞を立てくれられなけりやあ無で宜がね破家を見たあげくに後悔しなさんなよ
(CHJ, 53-人情 1858_07011, 20270, 春色連理の梅 1858)

5-2. 明治期の「馬鹿」

分類1：強意・強調の意味を含む強意型

近世に比べると用例数やバリエーションが増える。

- (37) いつまでもばかりきみをやつて、不都合を我慢するももうよい程だは
(CHJ, 60C 口語 1878_09102, 101910 文明田舎問答 1878)
(38) 大人数で汗水たらし、入らざる骨を折る物だから、実に馬鹿我慢を、張ては居られぬわけだ
(CHJ, 60C 口語 1878_09102, 161190、文明田舎問答 1878)
(39) 俗に馬鹿正直と云ふは正直一方にして詐り飾りの無き者に與へたる稱號にして世人は如此人物を痛く輕蔑するの傾向あり
(CHJ, 60M 太陽 1895_08051, 6170, 妄語戒即ち眞語律に就て 1895)
(40) 本統に馬鹿にお寒いぢやアありませんかね。 (CHJ, 60N 今戸 1896_11007, 9770, 今戸心中 1896)
(41) 生徒が小笠原式に、馬鹿丁寧に腰を折つてお辭儀するのを握り拳で失敬の眞似をしながら
(CHJ, 60M 女世 1909_03017, 31450, 御茶の水評判記 1909)
(42) お前の様に馬鹿に仕事をするものが有るか
(CHJ, 60M 女世 1909_13020, 27370, 作の歳に農家の生活を現した女の日記 1909)
(43) 中には髪を叮嚀にコスメチックでこねまはし馬鹿にハイカラがつたのもある
(CHJ, 60M 女世 1909_13059, 640 待合室 1909)

「馬鹿力み」「馬鹿正直」「馬鹿丁寧」のような「馬鹿+語」の用例と、「馬鹿に〇〇だ/〇〇する」のような用例に分かれる。

分類2：形容動詞として使用される通常型

- (44) 馬鹿な理窟は取るに足らない事でござる。 (CHJ, 60C 口語 1869_01103, 55050, 交易問答 1869)
(45) かかる大害あることを捨置ば世の馬鹿野郎どもはその奇麗なるに眼をくらみ
(CHJ, 60C 口語 1875_07202, 191210 開化問答 1875)

分類3：主に「馬鹿げる」という形で使用される動詞型

- (46) 予は其手段の正直にして公けなると、眞面目にして且つ馬鹿氣たるを、不思議に思ふなり
(CHJ, 60M 国民 1888_31020, 7580, 賈貨つかひ 松のうち 1888)
(47) 然し是れ程馬鹿氣た話は無いので、 (CHJ, 60M 太陽 1909_13046, 44180, 海軍と氣球 1909)

分類4：主に「馬鹿らしい」という形で使用される形容詞型

近世では言い切りの形で見られることが多かったが、明治期では(49)に示すように接辞「-さ」がついて名詞的に用いられるものも見られた。この違いは検索した資料による可能性はあるが、近世に比べて明治期以降のほうが「馬鹿」の造語力が強い可能性があると考えられる。

- (48) ほんにばからしいわけがますが広間の手水鉢でむけんの鐘をつかふかとはしごをあわててかけおりる
(CHJ, 60C 口語 1871_02203, 26310, 安愚楽鍋 1871)
(49) 御玄關番同様にいはれる事 馬鹿らしさの頂上なれば、(CHJ, 60M 太陽 1895_05026, 25050, ゆく雲 1895)

分類5：慣用的な表現で使用される慣用型

近世の用例は「馬鹿を見る」に偏ったが、明治期では他にもバリエーションが見られた。

- (50) 中裁人が馬鹿を見るほどに早く和合し、和合したる曉は一層馬鹿を見るほどに頓と候。
(CHJ, 60M 女雑 1894_44016, 11210, 菊女と云へる方への答 1894)
- (51) これを三馬に丸められて、飲んだら夫こそ馬鹿に付る薬なるべし
(CHJ, 60M 太陽 1895_07054, 25260, 小説家の片商賣 (承前) 1855)
- (52) 狂人になりかかりの變人なら狂人も同じだ、人うつけ、馬鹿も休み休み言ひねえ
(CHJ, 60M 太陽 1909_02026, 69590 銅山王 1909)

5-3. 大正期の「馬鹿」

分類1：強意・強調の意味を含む強意型

時代が下るにつれて、「馬鹿に+単語」の用例が増加する印象を受ける。

- (53) 洋服はばかかに評判がいいんですよ。
(CHJ, 60N あら 1915_11102, 9090, あらくれ 1915)
- (54) 晩には酒を飲ませてくれたが、その時の酒も大にうれしく又馬鹿に甘かつたので、今に忘れずに覚えてみる。
(CHJ, 60M 太陽 1917_09046, 22550, 忘れられぬ酒 1917)
- (55) だから母はまたあいつが馬鹿に可愛いんだね。親父に似てゐる處がたまらなく可愛いらしいよ。
(CHJ, 60M 太陽 1917_01037, 52000, 戯曲 生きんとすれば 二幕 1917)

分類2：形容動詞として使用される通常型

- (56) 何て莫迦なまねをしてくれたんだ。
(CHJ, 60N あら 1915_11024, 7580, あらくれ 1915)
- (57) 臺所のごだごだまで始終亭主の所へ持つて来る馬鹿が何處にあるか？
(CHJ, 60M 太陽 1917_01039, 121270, 歌さんの幻影 1917)

分類3：主に「馬鹿げる」という形で使用される動詞型

- (58) 常識から云へば馬鹿氣た事だが、僕は何かあいつと眞面目に話をしてみるとき
(CHJ, 60M 太陽 1917_01037, 54120, 戯曲 生きんとすれば二幕 1917)
- (59) 『父さんさよなら』と言はせる時分には、彼はもう可笑しいやうな、馬鹿氣切つたやうな氣分になつてみた。
(CHJ, 60M 太陽 1917_01039, 126300, 歌さんの幻影 1917)

分類4：主に「馬鹿らしい」という形で使用される形容詞型

- (60) 病的と云つてもいいほどの過去嫌ひを馬鹿らしいと嗤ふ氣にもなれなかつた。
(CHJ, 60M 太陽 1917_01038, 46700, 失はれた原稿 1917)
- (61) 男女の一生が輕卒に、運否天賦で結ばれて了ふ制度には、不安や馬鹿らしさを感じてゐた一人だつた。
(CHJ, 60M 太陽 1917_04038, 185860, 恐ろしき結婚 1917)

分類5：慣用的な表現で使用される慣用型

今回採取した用例では、「馬鹿を見る」のみが見られた。

- (62) 一々眞面目になつて批評するのは馬鹿を見る次第である。
(CHJ, 60M 太陽 1917_01038, 46700, 失はれた原稿 1917)
- (63) 所が是れで油斷をすれば頓でもない馬鹿を見るかも知れんよ。
(CHJ, 60M 太陽 1917_13007, 9700, 各政派の肚の底 1917)

5-4. 昭和期の「馬鹿」

昭和期に関しては前述の通り、用例が教科書のみであったことから、青空文庫を参照して少し用例を補足しておきたい。久生十蘭「あなたも私も」(初出:「毎日新聞」1954(昭和29)年10月29日~1955(昭和30)年3月24日)では、作品中、23例の「バカ」(1例は「馬鹿」)が見られた。

分類1: 強意・強調の意味を含む強意型

- (64) あなたみたいに、馬鹿正直に貧乏と取っ組みひともないもんだわ。もうすこし、暢気におやんなさいよ
- (65) 固いうえにも固い、官僚のコチコチが、第三国人の闇商人が住むようなバカでかい家に住んで、不良外人ぶって、密輸入の真似をしたり、ほしくもない女を困ったりするのは、なんのためなんでしょう?
- (66) いぜんお祖父さんのものだった、バカでかいベッドのうえで、叔母がむこう向きになって寝ていた。

分類2: 形容動詞として使用される通常型

- (67) 「途方もないことをいうのは、やめてちょうだい……それでなくとも、バカなことをやりだしそうで困っているんだから」
- (68) 「神月……ゆうべ自殺したのよ、ヴェロナールを飲んで……あのバカおやじ、頬紅なんかつけて、お化粧をして死んでたわ」

分類3: 主に「馬鹿げる」という形で使用される動詞型

- (69) バカげたようすをするので、腹をたてて、サト子が叱りつけた。

分類4: 主に「馬鹿らしい」という形で使用される形容詞型

- (70) 『アラミス』にいることを知って、待伏せをしていたとしか思えなかったが、顔を見ていると、バカらしさが先にたって、まじめな話などはできそうもなかった。

ここで着目したいのは、(65)「バカでかい家」(66)「バカでかいベッド」である。コーパスから採取した用例では、「馬鹿」に形容詞や形容動詞が後接する場合は「馬鹿に甘い」のように「に」を伴った。この「馬鹿+形容詞(でかい)」の例は、現代語の「馬鹿」の程度副詞用法と同様であると考えられる。

6. 程度副詞としての「馬鹿」の成立

今回の研究で分類1としてまとめた用例には、「馬鹿に+単語」のように「に」が付くものと、「馬鹿+単語」のように「に」が付かないものがあった。用例数を時代別にまとめると表2のようになる。

表2 「に」の有無と時代別の用例数

	近世	明治期	大正期	昭和期	
馬鹿+単語	6	32	15	1	54
馬鹿に+単語	2	37	56	3	98
152例中98例 (64.48%)に「に」	8	69	71	4	152

この「馬鹿に+単語」の用例の展開が、「馬鹿強い」など現代語の程度副詞用法の成立に関わっているのではない

⁴ (23)(24)「馬鹿らしい」の用例もここに含めている。「馬鹿らしい」は「に」が付いていないが「らしい」という接尾語が付くことで形容的意味を持っており、「馬鹿に」と同様であると判断した。

かと考えた。これ以降、便宜上「に」が付くものを[馬鹿に型]、「に」が付かないものを[馬鹿型]と表記する。以下、[馬鹿型]と[馬鹿に型]にどのような語があるか、時代別の異なり語で見ていく。

表3 [馬鹿型]

近世	馬鹿押, 馬鹿律儀
明治期	馬鹿丁寧, 馬鹿遠慮, 馬鹿我慢, 馬鹿強情, 馬鹿正直, 馬鹿丁寧, 馬鹿鱻漁, 馬鹿念, 馬鹿鱻, 馬鹿騒ぎ, 馬鹿褒め
大正期	馬鹿孝行, 馬鹿丁寧, 馬鹿正直, 馬鹿騒ぎ
昭和期	馬鹿丁寧

表4 [馬鹿に型]

近世	馬鹿らしい
明治期	馬鹿にお寒い, 馬鹿に高い, 馬鹿に重い, 馬鹿に広い, 馬鹿に早くから, 馬鹿に大きい, 馬鹿にでかい, 馬鹿に口が甘ったるい, 馬鹿に自惚れ強い, 馬鹿に虫のいい, 馬鹿に記憶が良い, 馬鹿に喧嘩好き, 馬鹿に華やか, 馬鹿に快活な, 馬鹿に垢抜けのした, 馬鹿にハイカラ, 馬鹿に粋だ, 馬鹿に頑物, 馬鹿にたくさん, 馬鹿にまわりみち, 馬鹿に似合う, 馬鹿に目立つ, 馬鹿に似よっている, 馬鹿に威張る, 馬鹿に齢を着した, 馬鹿に(金が)かかって, 馬鹿に大家めいたことを言う
大正期	馬鹿に高い, 馬鹿に安い, 馬鹿に大きい, 馬鹿に小さい, 馬鹿に眠い, 馬鹿に遅い, 馬鹿に細長い, 馬鹿に内気な, 馬鹿におとなしい, 馬鹿に可愛い, 馬鹿に荒っぽい, 馬鹿にしつこい, 馬鹿にいい, 馬鹿に評判がいい, 馬鹿に恰好の悪い, 馬鹿に鉄火, 馬鹿に快活, 馬鹿に陽気, 馬鹿に自的, 馬鹿に敏感, 馬鹿に単純, 馬鹿に上品, 馬鹿に綺麗, 馬鹿にハイカラ, 馬鹿にたくさん, 馬鹿に若く見える, 馬鹿にませている, 馬鹿にしよげる, 馬鹿に沈んでいる, 馬鹿に勉強する ⁵ , 馬鹿に落ち着いた, 馬鹿に濃すぎる, 馬鹿にはっきりした, 馬鹿に気に入る, 馬鹿に威張る, 馬鹿に最良にする, 馬鹿に動く, 馬鹿に勇躍する, 馬鹿にいい娘さん, 馬鹿に神経家, 馬鹿に悪い評判
昭和期	馬鹿にすばしこい, 馬鹿にひよる長い

表3と表4を見ると、[馬鹿型]よりも[馬鹿に型]のほうが様々な語と接続しており、造語力が高い。現代語の程度副詞用法は、こうした[馬鹿に型]から「に」が省略されたものであると考えられる。

7. おわりに

これまでの考察をまとめると以下ようになる。

- I. 強意の意味は、近世で既に[馬鹿型][馬鹿に型]の用例が存在していることから、近世までには生じている。
- II. [馬鹿型]は[馬鹿に型]より先に生じたと予想され、[馬鹿型]をベースにして表現の幅を広げたのが[馬鹿に型]である。
- III. 現代語における「バカ暑い」や「バカ面白い」は、IIの[馬鹿に型]が[馬鹿型]に統合されたものだと考えられる。意味的には[馬鹿に型]の性質が残っている。

⁵ 以下の例で、「随分と勤勉な」のような意味ではないかと考えた。
安藤君、馬鹿に勉強ですね。何かまた目論見でもあるんぢやないですか？

ただし、この考察は、今回採取した用例から導いたものであり、より正確な考察や研究をするならば中世やそれ以前の用例を調査し、より精度の高いデータを用いる必要があると考える。また、現代語の[馬鹿型]の程度副詞用法では、「馬鹿」がカタカナ表記されるなどの違いもあるため、今後は検索の条件やツールを変えるなどしてさらに検討したい。

最後に、本研究で筆者は「馬鹿」という言葉を取り上げた。研究の背景は何となく思い浮かんだからという曖昧なスタートだったが、思った以上に面白い研究結果を得ることができた。一番興味深いのは「馬鹿力」という言葉が「馬鹿」の研究をしようと思ったきっかけだったが、今回の用例には一つとして登場しなかった。今回の調査範囲が近世から昭和期までであり、「火事場の馬鹿力」という表現もあるため昭和期以降が初出ということは考えにくい。つまりこちらもコーパスの検索に掛からなかった言葉である可能性が高く、きっかけでありながら一度も対面することなく結果を迎えてしまった。今回使用したデータでは暫定的な範囲でしか事実を得ることができなかったが、その分考察が捗ったと感じたため、機会があれば同じテーマについてさらに調査を進めていきたい。

先行研究

- 鳴海伸一(2015)「第十章 「真実」とその類義語の意味変化と程度副詞化」『日本語における漢語の変容の研究 副詞化を中心として』ひつじ書房 pp. 181-202
- 深津周太(2022)「様態副詞の程度副詞化 — 「ちっと／そっと」の対照から—」『静言論叢』静岡大学言語学研究会 pp. 111-124

参考資料

- 国立国語研究所(2024)『日本語歴史コーパス』(バージョン2024.3, 中納言バージョン2.7.2)
<https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/> (2024年4月17日確認)
- Japan Knowledge Lib『日本国語大辞典 第二版』<https://japanknowledge.com/library/>
- アマーバブログ <https://ameblo.jp/>
- 青空文庫 <https://www.aozora.gr.jp/>

謝辞

本研究を進めるにあたり、副査指導として助言をいただいた人間文化学部 人間文化学科 柳川教授には大変お世話になりました。お礼申し上げます。

また、岩崎研究室の皆様には、本論文の執筆にあたり多くの助言、激励をいただきました。本当にありがとうございました。

We would like to thank Editage (www.editage.jp) for English language editing

The Evolution of the Adverb “Baka”

–Focusing on the Semantic and Functional Usage of Degree Adverbs–

Yuki SHIMADA, Mariko IWASAKI

Recent Japanese has seen the emergence of expressions such as *baka atsui* (“ridiculously hot”) and *baka omoshiroi* (“absurdly interesting”). In these cases, *baka* functions as a degree adverb meaning “very” or “extremely,” differing from its traditional meaning of “foolish” or “stupid.” This shift raises questions about when and why such usage emerged. To explore this, we conducted a historical analysis of *baka*, classified its meanings, and examined its semantic evolution.

Our findings indicated that *baka* has carried the meaning of “very” or “extremely” since the early modern period. During that time, expressions such as *baka richigi* (“foolishly honest”) followed the pattern *baka* + various words. Over time, constructions such as *baka ni* + various other words appeared, expanding its range of applications.

We conclude that the modern degree-adverbial usage of *baka* likely evolved from *baka ni* + various words into the more compact *baka* + various words, while its intensifying function has remained consistent since the early modern period.

【Key words : Japanese history, adjectival nouns, degree adverbs, Japanese linguistics】